

古英詩 *Andreas* における “ða” の用法

井 田 瑋 穂

古英詩 *Andreas* における “ða” の用法

1 George Philip Krapp は、*Anglo-Saxon Poetic Records* の第2巻 (1932) で *Andreas* を編集している。Kenneth R. Brooks も *Andreas* を別個に編集している (1961)。本論文でこの2つの版を、“ða” の用法について比較する。M. L. Samuels の2つの書評 (一つ目は、S. O. Andrew の *Postscript on Beowulf* についての書評 [1949]、2つ目は Brooks の版への書評 [1963]) が古英語においての “ða” の用法の問題点について示唆している。拙論では Samuels の示唆に従いながら、Samuels とは独自に主節と従節との密接度についての視点と、機能主義の「情報」の観点とから、*Andreas* の文脈に沿って、“ða” の用法を整理する。¹

ここで *Andreas* について簡単に触れる。この詩は1,722行からなり、9世紀末に作られたようである。*Vercelli Book* (イタリアに保存されている写本) に収められている。この時期の詩は全て後期 West-Saxon 方言で書かれて現在に伝えられている。

2 “ða” の用法についての現在までの研究を概観する。

語源的には “ða” は指示代名詞の具格である (F. Holthausen)。それが副詞に発展し、後には接続詞に発展している。“ða” (古英語) は副詞の場合は “then” の意味で、接続詞の場合は “when” の意味である。² “ða... ða” (“when... then” 又は “then... when” の意味) と相関的に使われること

もある。しかし、“ða”が相関的に使われない場合，“ða”の品詞の決定が難しい。A. Campbell (1970: p. 95) の指摘によると、文頭の“ða”は、品詞の決定が難しく、その決定は、個人の解釈によるとのことである。

Ða wæs morgenleoht
scofen ond scynded. Eode scealc monig
swiðhigende to sele þam hean...

(Then the morning-light had been sent forth and hastened. Many a retainer high of heart went to the lofty hall...) (*Beowulf* [Fr. Klaeber (ed.), 1922] 917-) (イタリックス筆者)

A. Campbell によると、この“ða”は、“then”とも“when”とも両方に解釈できるとのことである。

Bruce Mitchell (1985: §1925) によると、古英詩では、“ða”によって導入される従節は、主節の後の位置に来るのが一般的である。Möller (1937) による“ða”節の文中での相対的位置の統計がある (Mitchell: 1985, §2536)。

| text | 主節の後の位置 | 主節に含まれる | 主節の前の位置 |
|------------------------------|---------|---------|---------|
| <i>Beowulf</i> | 28 | 8 | 5 |
| <i>Genesis A & B</i> | 41 | 10 | 1 |
| <i>Anglo-Saxon Chronicle</i> | 14 | 1 | 98 |

(数字は例数)

Möller の数字で分かるのは、詩では、“ða”節は、主節の後の位置に来ることが多いことである——散文では反対の傾向がある。

M. L. Samuels に、ゲルマン系の頭韻詩での“ða”の用法についての指摘がある。

(1) ゲルマン系頭韻詩では、主節の後の位置を明らかに好む。この立場から、Samuels は K. L. Brooks の *Andreas* の句統点——特に“ða”節を主節の

前の位置に持ってきている箇所 (11. 230, 660) ——を批判している (1963: p. 176)。

(2) “com ða” (=came then) における “ða” は前接的 (enclitic) であり、相関的に使われる (“ða... ða”) のに必要な副詞として十分な力がない。“ða” は、文頭で使われて初めて、再開のためとか、叙述のための接続の不変化詞の働きをする。現代のテキスト編集者は、“ða” 節を主節と関連づけ、主節の後の位置に置くことが多い (1949: p. 61)。

以上の研究史をうけ、小論では、*Andreas* の2つの版を比較し、特定の文脈で “ða” が接続詞か副詞かどちらが適当な品詞かを考え、その決定の根拠を、「情報」の旧、新と、主節と従節との関係の密接度とに置くことを示したい。³

3 Krapp と Brooks の両方のテキストが “ða” をどのように扱っているかを見たい。2つに分類できる。

- (1) 両者が、“ða” を従節接続詞として解釈している場合 (12例)。
- (2) 両者の解釈が分かれる場合 (12例)。

最初の場合を見る。

| | 用例数 | 行 |
|---------------------|-----|---|
| 主節の後の位置 | 6 | 382-385, 624-627, 897-901, 1177 b -1178, 1317 b -1319, 1406 b -1411 |
| 主節の内に含まれる場合 | 2 | 429-433 a, 1418-1424 |
| 主節の前の位置 | 2 | 230-234, 449 b -452 |
| 相関的用法 “ða... ða” | 2 | 167 b -173 (“when... then”) 843 b -846 (“then... when”) |

次に両者の解釈が分かれる場合を見る。一方が主節、従節からなる1つの

文と解釈するが、他方は、“ða”を副詞と考え、2つの文と解釈するのである。どちらか一方が、“ða”を接続詞と考える例をあげる。

(1) 主節の後の位置にくる場合 (5例)

Krapp: 90b-94a, 761-767a, 1125b-1128

Brooks: 963b-969a, 1583-1585a

(2) 主節の前の位置にくる場合 (3例)

Krapp: 349-351, 1636-1642

Brooks: 666-671

(3) 相関関係 (ða... ða) (4例)

Krapp: 1311-1315, 1625-1629

Brooks: 1097b-1101, 1695-1699

4 ここで現代英語での“then”と“when”との用法について触れる。現代英語で“then”、“when”がどのように使われているかを調べ、規則を抽出したい。その抽出した規則を古英語の“ða”の用法に適用する。この拙論の方法についても批判を待ちたい。話者によって話される内容が、聴者〔読者〕にとって新情報か、旧情報かという観点から、“then”の後の内容と、“when”節の中の内容とを考えたい。⁴

“then”の後には、一般的に新情報がくると言える。任意の例を上げる。

In her room she [Lise] gets rid of the boy quickly, and without even taking her coat off lies down on the bed, staring at the ceiling. She breathes deeply and deliberately, in and out, for a few minutes. *Then* she gets up, takes off her coat, and examines what there is of the room. (p. 45) (イタリックスは筆者)⁵

この場合、Liseの行動は、読者にとって新しい一連の内容のものであり、新情報になる。“when”の用法は、主節の前の位置に来る場合と、後に来る場合に、分類できる。主節と従節との時間上の関係は、Quirk *et al.* (§§15.

25以下)によると、「同時性 (same time)」と「連続性 (time after)」の2つに分けられる。この分類は、妥当であると思われる。ここでは、情報の観点から整理したい。

(1) “when” が主節の後の位置に来る場合

主節も従節も両方の内容が新情報である場合が多い。

The voice says, ‘Thanks. Have a good holiday. Have a good time. Send me a card.’
 ‘Yes, of course, Margaret.’
 ‘Of course.’ Lise says when she has replaced the receiver. (p.16)

時間上の関係は「連続性」である。“has replaced” したあとで，“says” するという順序で前後関係が表現されている。

“when” 以下の従節の意味が，“... and then” 又は，“... and after that” である場合がある。

‘No, I’m going to the police-station right away,’ she [Lise] says in a calm voice as she gets in and shuts the door. She has already made off, already thrown the bag of wild rice out of the window, when the police arrive in the scene. (p.98)

“has already made off” のあとで，“arrive” するという時間の順序がある。

(2) “when” 節が、主節の前の位置に来る場合

“when” 節の中に含まれる情報により2つに分けられる。

① 新情報の場合

② 旧情報の場合

①の例として次の例がある。

At the hotel desk she [Lise] seems rather confused as if she is not quite sure where she is. She gives her name and when the concierge asks for her passport she evidently does not immediately

understand. (p. 44)

時間上の関係は「連続性」と解釈できる。

②の例として次の例がある。

Then, with some access of decision, she [Lise] takes off her dressing-gown and slippers and starts putting on again the same clothes that she wore on her journey. When she is dressed she folds the dressing-gown, puts the slippers back in their plastic bag, and replaces them in her suitcase. (p. 49)

“when”節の中が、前文の“starts putting on…”の結果としての“is dressed”(完了している状態)であり、“starts putting on…”から帰結できるので、新、旧半々の情報である。

現代英語の場合、“when”節の中は、新情報のことが多い。一般に、情報の中心は、主節にある。従節が主節の前の位置に来る時は、従節の意味上の働きは、「～について言えば」という状況の設定にあるという福地肇(1985: p. 83)の説明が妥当である。従節が主節の前に来て、従節の中の内容は、旧情報とは限らない。“when”節は主節の前にも、後ろの位置にも自由に来れるということである。従節に含まれる情報は、新情報が多い。⁶

5 現代英語の分析をふまえて、*Andreas*での“*ð*a”の用法を考えたい。Krapp と Brooks とが同じく“*ð*a”を接続詞と解釈している例を、この節で考える。低し、主節の内に含まれる場合(2例)と、“*ð*a... *ð*a”の相関関係(2例)とは除く。

(1) “*ð*a”節が主節の後の位置に来る場合

- ① “*ð*a”節が主節に埋め込まれている場合
- ② “*ð*a”節が主節に埋め込まれていない場合

①の例として、624-627, 897-901, 1317 b-1319がある。そのうち、624-627の場合は、以下のようである。

“Miht ðu [Andreas], wis hæleð, wordum geseccan,
 maga mode rof, mægen þa he [God] cyðde,
 deormod on dige, ða mid dryhten oft,
 rodera rædend, rune besæton?”

(Bradley [trans.]: “Can you, a wise man, a person noble of mind,
 put into words the power that he, forthright in private, revealed
 when you often held conversation with the Lord, the Arbiter of
 the heavens?”)

構造 : Miht ðu... wordum geseccan *magen*

↑
 ða he cyðde

(関係代名詞)

↑
 ða...

(接続詞 [従節])

(以下、矢印は「修飾」を示す)

“magen” を修飾する関係詞節 (“ða he cyðde...”) の中に “ða” の時を表す従節が含まれている。以上3例は, “ða” の従節が主節と切り離すことはできない場合で, Krapp と Brooks とのテキスト以外には解釈できない。

②の場合は, 382-385, 1406 b-1411, 1176 b-1178である。3例のうち, 382-385を以下にあげる。以下, 拙論で Cf. (参考) としてあげる箇所は, 問題とする箇所に行先する部分である。文脈をはっきりさせるために引用するのである。

Him þa se halga on holmwege
 ofer argeblond, Andreas þa git,
 þegn þeodenhold, þanc gasægde,
 ricum ræsboran, þa he greordod wæs:

(Bradly [trans.]: Even then above the welter of the waves upon
 the ocean path Andrew, a thane loyal to his Lord, still spoke his

thanks to the capable master, since he had been provided with food.)

構造 : Andreas þanc *gesægde*

(新情報)

↑
ða he gereordod wæs
(従節) (旧情報)

Cf. 364-369:

Ða reordode rice þeoden,
ece ælmihtig, heht his engel gan,
mærne maguþegn, ond mete syllan,
frefran feasceafte ofter flodes wylm,
þæt hie þe eað mihton ofer yða geþring
drohtaþ adreogan.

(Bradly [trans.] : Then the powerful Lord, everlasting and almighty, spoke; he ordered his angel, his glorious minister, to go and give food and afford comfort to the ill-provided men upon the surging of the water so that they could more easily endure their lot upon the heaving of the waves.)

構造 : rice þeoden heht his engel gan ond *mete syllan*
(新情報)

ここで“ða”節の内容は、364-369の中の“mete syllan”からの帰結として推論できるから、新、旧半々の情報の内容である。更に、この3例の“ða”節は、主節の行為の行われた状況の設定の従節として、切り離し不可能である。

(2) “ða”節が主節の前の位置に来る場合

この場合については、前述のように、Samuelels は批判的である。230-234, 449 b-452がこの場合に入る。230-234は、“ða”節の中の情報が旧情報と考えられ、“when”と解釈したほうがよい。

Ða wæs ærende æðelum cempa
aboden in burgum, ne wæs him bleað hyge,

ah he wæs anræd ellenweorces,
heard ond higerof, nalas hildlata,
gearo, guðe fram, to godes campe.

(Bradley [trans.]: When the errand was announced to the noble soldier [Andrew] in the city, his heart was not timorous but he was single-mindedly set upon the courageous task, tough and brave-minded, not at all a sluggard in the fray but eager for the fight and ready for God's warfare.)⁷

Cf. 174-177 (the Lord's words):

“Ðu [Andreas] scealt feran ond frilð lædan,
siðe gesecan, þær sylfætan
eard weardigað, eðel healdað
morðorcraeftum.”

(Bradley [trans.]: You are to go and commit your being to a journey to visit a place where eaters of their own kind inhabit the country and rule the land with murderous practices.)

174-177での主の言葉の内容が、230-234の“ða”節の中の“ærende (= errand)”でまとめられているといえる。“ða”節の中は旧情報をになうということである。

449 b-452は，“then”とも“when”とも解釈できる。

Ða seo menigo ongan
clypian on ceole, cyning sona aras,
engla eadgifa, yðum stilde,
wæteres wælmum.

(Bradley [trans.]: When the group on the ship began to cry out, forthwith the king, the munificent Lord of the angels, rose up and stilled the waves and the water's surgings.)

Cf. 447b-449a:

Beornas wurdon
forhte on mode, friðes wilnedon,

miltsa to mærum.

(Bradley [trans.]: The men were growing fearful at heart; they made entreaty to the glorious Lord for his safekeeping and mercy.)

この場合, “ða” 節の内容は, 新情報である。

6 Krapp と Brooks とが解釈の違い箇所を扱う。“ða... ða” の相関的用法を除く。

(1) “ða” 節が主節の後の位置にくる場合

Krapp: 90b-94a, 761-767a, 1125b-1128

Brooks: 964b-969a, 1583-1585a

以上の例の “ða” 節の中の内容は, 全て新情報である。但し, この 5 例の中, Brooks の 1583-1585a は, “ða” 節を “when” の意味でしか解釈できない。

*Wurdon burware bliðe on mode,
ferhðgefeonde, þa wæs forð cumen
geoc æfter gyrne.*

(Bradley [trans.]: The citizens were joyful in their mood, exultant in spirit, since aid had been forthcoming after misfortune.)

構造: *Wurdon burgware bliðe on mode*

↑
ða wæs cumen geoc

(従節)

Cf. 1575b-1577a:

*þa se æðeling het
streamfare stillan, stormas restan
ymbe stanhleoðu.*

(Bradley [trans.]: Then the noble man [Andrew] commanded the running of the stream to be stilled and the storms about the

Brooks: 666-671

この3例では、“ða”節の中の内容は、新情報であり、“when”と“then”との両方の解釈ができる。そのうちの一例として、Krappの349-351をあげる。

Þa in ceol stigon collenfyrdhðe,
ellenrofe, æghwylcum wearð
on merefarodhe mod geblissod.

(Bradley [trans.]: When they stepped into the ship, bold in spirit and strong in courage, the heart of each man was filled with delight upon the surging ocean.)⁹

Cf. 344-348 (the Lord's words):

Þonne ic eow mid gefean ferian wille
ofter brimstreamas, swa ge benan sint.

(Bradley [trans.]: Then I will ferry you across the ocean currents with pleasure, as you request.)

7 以上をまとめると、次のようになる。

Krapp と Brooks とが共通に“ða”節を従節としている例と二人の解釈が違い、一方しか“ða”節を従節として認めない例とを含めて16例についてまとめる。但し、主節の内に含まれる場合と、“ða... ða”の相関的關係の場合とを除く。¹⁰

(1) “ða”節が主節の後の位置に来る場合 (11例)

① “when”としてだけ解釈できる例 (7例)

共通: (埋め込み): 624-627, 897-901, 1317 b-1319

(主節の状況の設定): 382-385, 1176 b-1178, 1406 b-1411

Brooks: (主節の状況の設定): 1583-1585 a

② “then”とも“when”とも両方に解釈できる例 (4例)

Krapp: 90b-94a, 761-767a, 1125b-1128

Brooks: 964b-969a

(2) “ða” 節が主節の前の位置に来る例 (5 例)

① “when” としてだけ解釈できる例 (1 例) : 共通 : 230-234

② “when” とも “then” とも解釈できる例 (4 例)

共通 : 449b-452

Krapp: 349-351, 1636-1642

Brooks: 666-671

以上の判断の根拠は、結論的には、次の点にある。

(1) “ða” が “then” の意味の時は、“ða” の後には聴者 (= 読者) にとって新情報がくる。

(2) “ða” が “when” の意味の時 (従節を形成する時)。

① 主節の前か後かいずれの位置の時も、内容的に新情報が多い。この時には、“then” の意味にも解釈できる。

② しかし、主節の後の位置で、“ða” 節が主節の状況を設定すると解釈できる時には、“ða” は、“when” の意味だけになる。

③ 主節の前の位置で、“ða” 節の内容が旧情報の時には、“when” の意味と解釈した方がよい。

このように、情報という観点と主節と従節との密接度という視点とから、*Andreas* の “ða” の用法を整理した。

A. Campbell と M. L. Samuels との指摘とを發展させ、一部、M. L. Samuels と違う見解を述べた。即ち、Samuels は、“ða” 節が、主節の前の位置にくる例を認めないが、拙論では、一例、認めることになった。“when” とも “then” とも解釈できるとする例が拙論には多い。Samuels では、“then” の意味で、全ての例を解釈できる可能性を示すが、拙論では、その “then” を “when” とも解釈できると主張するのである。この意味で、拙論は、A. Campbell の立場に近い。Samuels も Campbell も、情報とか、主節と従節との密接度とかを、各々の立場の根拠にしていないので、この点で

は、拙論の主張は、新しい。Samuels が触れるゲルマン系頭韻詩一般における、従節の位置についての研究は、今後の筆者の課題であるので、拙論では、扱わなかったことをお断りする。¹¹ (1992年1月31日)

付記：日本英文学会中国四国支部第44回大会（1991年10月19日，鳥取大学）で、「古英詩 *Andreas* における ða, ðeah と句読点」という題で発表した原稿を、本稿は、大幅に、発展させた。発表の席で、コメントを頂いた酒見紀成氏（司会）（広島工大）と中尾佳行氏（山口大）とに、お礼申しあげる。

注

- 1 *Andreas* の “ða” を特に扱う理由について簡単に述べる。Krapp と Brooks とのテキストの比較をすると、両者の違いの一つに、“ða” の扱い方があることに気づく。更に Samuels の書評が、“ða” の扱い方を重視しているのも、筆者を刺激した。古英語の他の詩と散文での “ða” の用法の検討は今後の課題である。
- 2 “ða” と関連して、ドイツ語の “da” について、相良守峯『ドイツ語学概論』（東京：博友社、1965）参照。「従属的接続詞を有する副文が元来は主文であった……こ [れら] の接続詞は……主文の中の一成分であったものである。Da er krank war, konnte er nicht kommen. <Er war krank: da konnte er nicht kommen.> (pp. 337-338)
- 3 文体の観点から、“ða” の用法を扱う試みに次の2つの論文がある。特に Forster は、“audience”（聴者）と、叙述の文体との観点をいれて、“ða” の効果を考察している。Nils Frik Enkvist, “Old English Adverbial ÐĀ—an Action Marker?” *NM* 73 (1972), 90-96. Robert Foster, “The Use of ÐA in Old English and Middle English Narratives” *NM* 76 (1975), 404-414.
- 4 機能主義文法については、次の書を参照。M. A. K. Halliday, *An Introduction to Functional Grammar* (London: Edward Arnold, 1985) [“Given+New is listener-oriented.” “The Given is what you, the listener, already know or have accessible to you.” (p. 278)]. 安井稔『新しい聞き手の文法』（東京：大修館書店、1978）。
- 5 以下、Muriel Spark, *The Driver's Seat* (Harmondsworth: Penguin Books, 1974) から現代英語の用例をあげる。どの作家のどの小説でも用例としては、かま

わない。

- 6 “when” 節が主節の前にくる時, “when” 節の内容は, 旧情報が多いという説を, 村田勇三郎は述べるが, 実状にあわない。村田『機能英文法』(東京:大修館書店, 1982) [「副詞節は……文頭にあられると, 常に旧情報の前提として解釈される」(p. 227)]。中島平三の次の指摘が, 実状の説明にあう。「[“when” の] 副詞節と主節の動詞句との結合が比較的希薄である……『時点』の副詞節を文頭へ前置できるのも, この結合の希薄さに由来していると考えられる。」(今井邦彦, 中島平三『文Ⅱ』 [「現代の英文法」第5巻] [東京:研究社, 1978], p. 398.)
- 7, 8, 9 テキストの句読点にあわせて, Bradley の訳文を一部変えてある。
- 10 “ða... ða” の相関的用法については, 筆者に新見はない。Samuels の見解に基づいて (拙論 2. [2]), *Andreas* における “ða... ða” の用法を, 以下のように整理する。
- (1) Krapp と Brooks とが共通に相関として認めている例: 167b-173, 843b-846. この 2 例は, 句頭に “ða” がきているので, Samuels の基準に合い, 容認できる。
- (2) Krapp か, Brooks かのどちらか, 一方が, 相関として認める場合
 Krapp: 1311-1315, 1625-1629
 Brooks: 1097b-1101, 1695-1699
- この 4 例の内, Krapp の 1625-1629 は, Samuels の基準に合い, 相関として認めることができる。しかし, ほかの 3 例は, Samuels の基準を満たさないので容認できない。
- 11 拙論中に, 「新, 旧半々の情報の内容」という曖昧な表現がある。情報の新旧の決定の更に明確な論述は, 今後の課題である。

References

Texts:

- Krapp, George Philip. *The Vercelli Book (Anglo-Saxon Poetic Records 2)*.
 New York: Columbia University Press, 1932.
- Brooks, Kenneth R. *Andreas and the Fates of the Apostles*. Oxford: Oxford University Press, 1961.

Others:

- Bradley, S. A. J. (trans.) *Anglo-Saxon Poetry*. London, Melbourne and Toronto:
 Dent, 1982.
- Campbell, Alistair. ‘Verse Influence in OE Prose’ in *Philological Essays in*

- Honor of Herbert Dean Meritt* ed. James L. Rosier (The Hague, 1970).
福地肇 『談話の構造』(「新英文法選書」第10巻) 東京:大修館書店, 1985。
Holthausen, F. *Altenglisches Etymologisches Wörterbuch*. Heidelberg: Carl Winter Universitätsverlag, 1974.
Mitchell, Bruce. *Old English Syntax*. Oxford: Oxford University Press, 1985.
Quirk, R. *et al.* *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London and New York: Longman, 1985.
Samuels, M. L. *MAE* 18 (1949), 60-64 (Review of *Postscript on Beowulf* [1948] by S. O. Andrew).
Samuels, M. L. *RES* 14 (1963), 175-177 (Review of Brooks' edition).

1992. 1. 31 受理

Synopsis

The Usage of “ða” in *Andreas* (Old English Poem)

Hideho Ida

1 George Philip Krapp edited *Andreas* in vol. 2 of *Anglo-Saxon Poetic Records* (1932). Kenneth R. Brooks also edited it (1961). In this paper we will compare these two editions concerning the usage of “ða.” We will mainly focus on M. L. Samuels’ review articles (one about *Postscript on Beowulf* by S. O. Andrew [1949], and the other about Brooks’ edition [1963]).

2 We will examine closely the usage of “ða” in *Andreas* (sixteen examples): eight examples in which both Krapp and Brooks take “ða”s to be conjunctions and eight other ones in which either Krapp or Brooks takes “ða”s to be conjunctions. M. L. Samuels does not admit any examples in which “ða” clauses come before the principal clauses. But we admit one example in which “ða” clause comes before the principal clause (11, 230–234). We often interpret “ða” as both “when” and “then”:

Both editors have the same text: 449b–452

Krapp: 90b–94a, 349–351, 761–767a, 1125b–1128, 1636–1642

Brooks: 666–671, 964b–969a

At this point we have the same view as A. Campcell does. And we have seven examples in which we can only interpret “ða” as “when”:

Both editors have the same text: 382–385, 624–627, 897–901, 1176b–1178, 1317b–1319, 1406b–1411

Brooks: 1583–1585a

We base our view upon the closeness between the principal clauses and the subordinate ones, and the new and old information. The next points

are the basis of our judgment:

(1) When “ða” means “then,” the new information to the listener (= the reader) comes after “ða.”

(2) When “ða” means “when” (“ða” forms subordinate clauses),

① We can interpret “ða” as “then” too, if the new information comes after “ða.”

② We can only interpret “ða” as “when” if “ða” clauses come after the principal clauses and these “ða” clauses specify the situation of the principal clauses.

③ We can only interpret “ða” as “when” if “ða” clauses come before the principal clauses and these “ða” clauses convey old information to the listener (=the reader).

“Ða” is enigmatic in Old English concerning its part of speech. This article is a small attempt to solve the question. (I would like to thank Professor B. D. Tucker for making better English expressions in this synopsis.)